ロシア革命の印象

〔一九一九年一二月、エマはA・ベルクマンその他の同志達と共に（総勢五一名）米国での活動のため、国外退去に遭い、ロシアへ赴いた。時にロシアは革命闘争の最中で、エマは理想の完成されるのを夢みたが、現実はロシア民衆の飢餓と流血、欧州諸国による経済封鎖、それにボルシェヴィキの台頭、レーニンの指導により革命から国家へ移管する過渡期であった。そこで見聞した多くは彼女に幻滅と悲哀をもたらした。

先づペトログラードへ着くと要求されたのがパスポート(**propusks**)であった。何故身分証明書が必要なのか？　反革命者と区別するためである。では反革命者がわざわざ列を作ってパスポートを得るのに何日も浪費するだろうか？　ペトログラードの市民は凍えている。では近郊の森を伐採して、燃料にしたらどうだろう。党の指導者ツノヴィエフは答える。〈それは党の政策に介入することだ。全権力はプロレタリアの前衛の手中にある。そして革命の前衛は共産党である。プロレタリアートの独裁こそ、革命期に働く唯一のプログラムだ。アナーキストグループは、教えの通り自由コミューンを言うが、将来のことだろう。デニキンやコルチャックがわれわれを打倒しようとしている今のロシアではあり得ない。ところが君達の同志ときたら、一つの都市の運命について、ぐずぐず言うのだ。〉

革命期には一個人、一つの都市の運命は考慮に価しないのだろうか？　同じように内戦

に苦しむ民衆、子供、ユダヤ人はどうだろう。

エマとA・ベルクマンは、革命博物館のための資料収集を依嘱され、それを機会にロシア探訪の旅行にでかける。都市、地方のいづれでも良心的な共産党員が党の政策によって犠牲を強ひられ、アナーキストは逮捕され分裂している。エマはレーニンを支持した自己の革命観に忠実であろうとすればする程、現実の露呈する矛盾によって引裂かれる。この時期、ロシアで撮った彼女の写真（モスクワ・一九二一年）は眼鏡を失い、想いつめた様子である。革命において、〈目的は手段を正当化するか〉彼女は自己に問いつづけた。その内容の鋭さと正確な把握は、彼女がもとロシア生まれで、言葉の障害を克服し、人びとと直接語ることができたからだと思われる。〕

ロシアで…

ソヴェトロシア！聖地、魔法の民！　貴方達は人類の希望を象徴化した。貴方達が人類を救済するよう運命づけられているのだ。わたしは貴方達に奉仕するためやってきたのです。愛するマツーシカ。胸に抱いて下さい。わたしを貴方に注ぎ、わたしの血を貴方に交じえ、貴方の英雄的な闘争にわたしの居場所をみつけて下さり、貴方の必要に力をかさせて下さい。

ペトログラードへ向う国境で、彼の地の駅で、わたし達は同志に迎えられた。アメリカを重罪犯人として追われたわたし達が、ソヴェトの地で、その解放を助けている息子や娘達に兄弟として迎えら

れたのです。労働者、兵士、農民に取囲まれ、彼等は手をさし伸べ、わたし達を近親者だと思って呉れました。顔色は蒼白で頬のこけた彼等は、落ちこんだ眼に燃えるような輝きがあって、ぼろをまとった身体からは決意が息づいていた。その意思は危険と苦しみで鋼鉄のように鍛えられ、冷やかでした。でもその下には古くからの子供のようなやさしいロシアの心が鼓動して、惜しげなくわたし達に伝わりました。

何処でも音楽と歌がわたし達を歓迎して呉れ、飢餓や寒さ、荒廃による病気に直面した際の勇気と屈しなかった忍耐の物語を聞きました。わたしの眼には感謝の涙が溢れ、革命闘争の火の中で、偉大になった素朴な民衆を前にして、大いなる恥じらいを覚えました。

ゴーリキと語る

以前ゴーリキはわたしの手紙に返事して、話に来るよう言ってきました。訪ねたけれど話はできなかった。彼が重い風邪にかかり、四人の女性達が彼の身の回りにかしづき、用を足していたのです。彼は列車の中でわたしを認め、道々これまで延びのびになっていた話をしたいから、あとでわたしの席へ寄ると言いました。(当時エマはペトログラードで見聞した事実が革命の理想と相違するのを知り、悩んでいた。これはペトログラードから首都モスクワへ向う途中の出来事である—訳註)わたしはその日の大部分を心待ちしました。ゴーリキは現われず、来たのはボーイだけ、ソヴェトの党の人達に

サンドウイッチとお茶を運びました。ラデック(カール・ラデックはドイツ共産党員、リーブ・クネヒト、ローザ・ルクセンブルグ、ランドワの遭遇した運命から遁れ、ロシアを訪れていた—訳註)は隣りの区切られた室にいる。本当のロシア式に、みんなが一斉に喋舌る。でもしばらくすると、ラデイックが他の人に優れ、何時間も喋舌るのでした。わたしは頭が疲れ、居眠りしました。

わたしが眠りから醒めると、やつれて背の高い人がわたしに覆いかむさるように立っているのでした。マキシム・ゴーリキが眼の前にいて、彼の農民の顔は、苦悩で深くしわが寄っていた。わたしは彼に坐るように言い、彼は崩れるように席につき、五〇才の年より老け、疲れ面やつれしていました。

前もってゴーリキに話す機会を求めていたのに、何から切りだしていいか判らない。〈ゴーリキは、わたしの事なんか知らないんだわ…〉わたしは自分に言いきかせました。〈彼はわたしが革命などに反対する改良家ぐらいに考えているんだ。でなければ、個人的な不如意のためここが場所違いじゃないかとか、〝朝食にバター焼パンとグレープフルーツ〟や他のアメリカ的豊富さがここにないので、不平を言っている女ぐらいの印象しか、持てないのじゃないか知ら…そういう経験はモリス・ベッカーが、自分の働いているお店の嫌な空気と耐えがたさで不平を言った時、革命委員が彼に言ったものです。〈君は甘やかされたブルジョワだ。資本家のアメリカの快適さに執着している。プロレタリアの独裁は、君のパンとお茶を清潔に保つ換気装置やロッカーを考えるより、もっと大事だよ〉わたしはこの話を聞いた時、涙が出る程お可笑かった。でも今はマキシム・ゴーリキがわたしのことを同じような甘やかされたブルジョワと思いはしないか、ソヴェトロシアに、アメリカ資本家の、美食をみつけだせないから、不満をもつのだと思っていやしないか、案じました。でもゴーリキが、ボルシェヴキの下級職員と同じようなたわごとを言うとは思えないと考えました。最下層の生活に美を嗅ぎつけ、粗

野の中に高貴さをみつける視覚者は、わたしの手探りによる誤解を、はるかに深く見透している筈です。彼は誰よりもその原因と苦痛を把握しているのです。

ようやくわたしは、自己紹介して、わたしを悩めている事柄につき、彼に語ることができました。

「その必要はないようだ」ゴーリキがとめた。

「あなたの米国での活躍はよく知っています。例え知らなくても、あなたがあなたの理念のため、退去をさせられたということだけで、高潔な革命家の証拠になるのです。」

「それはどうも有難うございます。でももう少し、初歩的な事をお訊ねしたいのですが…」

わたしは返辞した。ゴーリキがうなづくので、十月革命の極く初期からのボルシェヴキに対するわたしの信頼、レーニンとその同志を、ラジカルな人びとの間でさえ、よく言うものの少なかった際に、わたしが彼等とソヴェトロシアを擁護したのを語りました。それから一転して、キャサリン・ブレシコフスカーヤが一世代の導きの松明であったこと。理論では、わたしの政敵である人びとを擁護するのは、憤激と憎悪の野に叫ぶことであって、決して容易な仕事ではなかったこと。でも革命の生命がかかっていて、そんな差異を考えるなんて誰にできるでしょうか。レーニンとその協力者は、わたしやわたしの同志、友人達にとって、生命を具現化するのです。だからわたしはあの人達のため、闘ったし、革命の保塁を死守する人に自分の命を喜んで差出すのです。

「アメリカでソヴェトロシアのために闘ったわたし達の闘争の困難さを、誇っているとか大袈裟に言うのだとは思わないで下さい。」

わたしがそう語るとゴーリキはうなづいた。

「それから、わたしはアナーキストですが、古いロシアの破壊によって、アナーキズムが一夜のう

ちに起きると考える程、素朴ではないことも信じて欲しいのです。」

彼は手でジェスチュアを作ってわたしを押しとどめた。

「もしそうだとすると、あなたがソヴェトロシアの不完全さに困惑することはないのじゃないだろうか？　あなたは古くからの革命家として、革命は苦しい休みのない仕事だと知らなければいけない。わが不幸なロシアは、遅れていて、粗野で、大衆は幾世紀にも亘る無知と闇の中にのめりこみ、世界のどの民衆よりも野蛮で怠け者です。」

わたしは彼が全ロシア民衆を告発する激しさに息を呑んだ。彼の非難は、もし真実だとしたら、厳しすぎると彼に答えました。それは少々小説的です。いままでロシアのどの作家もそんな言葉を言っていない。マキシム・ゴーリキが最初の特異な視点を進める人であり、デニキンやコルチャック（いづれも白軍・反革命軍を率いた将軍の氏名―訳註）の封鎖にすべての罪を着せる最初の人じゃないと…わたしは言った。彼はいくらかいらだち、答えました。〈わが文学の天才達の浪漫的観念〉がロシアを全く誤って表現し、悪を終らせ得なかった。革命は、農民の善良さと素朴さのあぶくを追払った。革命が農民のずるかしこさ、強欲、怠け、苦痛を引き起こさせてそれが喜びだとするような気質を証明した。反革命のユーデニッチの徒の役割は、特に強調する必要があると彼は言うのです。だがそれだって大したことじゃない。インテリゲンチァだ。これは五〇年以上も革命を語っていながら、サボタージや反逆で革命の背後を衝いたのだ。しかしこれは傍系的な要因で、主流じゃない。根はロシアの粗野で非文化的大衆にある…と彼は語った。大衆は文化的伝統がなく、何の社会的価値もなく、人間の権利と生命を尊重しない。強制と力によってしか動かされない。ロシア人は長年に亘ってこれ以外、何も知らない。

わたしはむきになってこれらの非難に反対した。彼が他国民の優れた性質に明瞭な信頼をもっているにもかかわらず、初めて反逆に起ち上ったのは、その無知で粗野なロシア人なのです。彼等が過去一二年間、相続く革命でロシアを揺がせ、あの〈十月〉に生命を与えたのも彼等であり、彼等の意思でした。

「雄弁だね」ゴーリキはいい返しました。

「でも正確じゃない」彼は言う。十月の蜂起での農民の参加は、意識的な社会感情からではなく、長年蓄積した憤激に過ぎないと思う。もしレーニンの導きでチェックしなかったら、更に前進する偉大な革命的目標をきっと破壊しただろう。レーニンは十月革命の本当の父親だと、彼は主張しました。レーニンの才能によって考えられ、彼のヴジョンと信念で養われ、先見の明と辛棒強い看護によって成熟したのである。他の者はその元気な子供を引きだす助けをしただけだ。特にそれがボルシェヴキの小集団で、またこれを支援したのが、ペトログラードの労働者、クロンシュタットの水兵と兵士達だった。十月が生まれると、その発展と成長をすすめたのが、またレーニンだった。

「あなたのレーニンは奇蹟の人ですね」わたしは叫んだ。

「でもあなたがいつもレーニンを神だとか変らぬ同志だとみていた訳ではないのを、知っていますよ。」

わたしはゴーリキがケレンスキー時代に発行していた彼の雑誌〈Zhizn〉でボルシェヴキを告発したのを思い出させました。何が彼をこれ程に変えたのでしょう？ ゴーリキは自分がボルシェヴキを攻撃したのを認めたけれど、事情の展開が、野蛮人の原始国での革命は、自衛の激烈な手段を用いなければ、生きつづけられないと確信させたと言う。ボルシェヴキは多くの過ちを犯し、未だに継続し

ている。それは彼等だって認めているのだ。しかし、全体のために個人の権利を、チエーカ、刑務所、恐怖そして死によってさえ抑圧するのは、彼等の望むところではない。それらはソヴェトロシアに強いられた手段であって、革命の闘争では彼等だって避けられないのだ。

彼は疲れ切ってみえました。去るのを引きとめなかった。彼はわたしの手をとって、辛らそうな様子で歩み去った。わたしもまた、疲れ、言いがたく悲しかった。二人のゴーリキのうちどちらがロシア人の魂に近いのだろうか？ あれが〝マーカー・チュードラ〟〝チエルカーシ〟の作家、どん底〟の著者、〈もの言わぬ残酷な野蛮人〉のロシア大衆の語り手なのだろうか？ ゴーリキがどれ程、民衆を子供らしく偽りないものとし、またその挫折をどのように描いたことでしょう！ 彼は民衆の中で、その〈暗闇とぬかるみの他何もない所〉で住み、彼等の〈生きたい激しい叫び〉を聞きつけ、〈彼が後に残してきた苦しみの証拠を握って浮びあがってきた〉人なのです。あれがロシアの本当の魂だろうか。ここでゴーリキが描いてみせたのはレーニンに耳打ちする人としてのゴーリキではないだろうか？ それはこう言うのです。

「一千万の民衆、野蛮人は鎖につなぐ野蛮な方法が必要だ。」

彼が本当にあの恐ろしいことを信じているのだろうか、それとも彼の神の光栄を高めるために、作り話をしたのだろうか？

マキシム・ゴーリキは、わたしの偶像でした。だからわたしは彼の泥作りの足をみようとしなかったのです。でもわたしには一つの事柄が納得できた。彼だって外の人だって、わたしの疑問は解けない。時間と辛棒強い探求だけが、ロシアの革命闘争における原因と結果を、同情をもって理解すれば、解決できるのです。

ガリーナ・マフノの訪問

〔エマ、ベルクマンその他の一行はロシアを旅行し、カルコフ、キエフを訪れた。一九二〇年八月～九月の間だと推定される。〕

アロン・バロンとヨセフは、ペトログラードにいた時も、わたし達を訪ねてきました。それは秘かな訪問で、両人はボルシェヴキから非合法化されていたのです。彼等は、共産主義者達が序々に革命の裏切り者になっていった条件や原因を活きいきと語り、二週間に亘って、強烈な興味をもたせて呉れました。だけどわたし達をよく知っていて呉れる人達は、レーニン、トロッキー、そしてその共調者が、マフノやわが同志に向け誤った政策を執っているからと言って、その人達の革命的高潔さを、わたし達が疑うようしむけられないと理解していました。わがカルコフの同志達はわたし達にそう期待するのは尚早だと認めました。だけど今になったら、わたし達がソヴェトロシアで八ヶ月を過し、状態を身近に学ぶあらゆる機会に恵まれたのだから、なぜまだちゅうちょするのか、と言うのです。運動がわたし達を求めている。活動分野は広大で有望だ。われわれは容易にウクライナのアナーキストを、一つの強力な連合体にして、その宣伝により労働者と農民にまで到達できるのだ。特に農民はネストル・マフノの援助にたよれる。マフノは農民を知っていて、農民も彼を信頼している。彼

は南部（ウクライナ地方のこと―訳註）が提供した有利な宣伝の可能性を、全国的なものにするようアナーキストにすすめていました。彼はわたし達に資金を含めて、印刷機、紙、手伝い等すべてを委せるから早急に決心をつけるように訴えていると、同志達がすすめるのです。

もしわたしがロシアで活動すると決心するなら、マフノへの支援は、レーニンによる、第三回インターナショナルで助けて欲しいとの申し出と同じ位魅力がないと、人に語りました。わたしはマフノが白軍に対する闘争において、革命に奉仕したのは否定しないが、彼の Povstantsy 軍が、農民の自発的な大衆運動だというのは事実じゃない。しかもわたしは、アナーキズムが軍事活動から得るものがあるとか、わたし達の宣伝が軍事的または政治的戦利品に依存するとは考えなかったのです。けれどそれは主眼点じゃない。わたしは彼等の仕事に参加する地位にいなかったし、ボルシェヴキだってもう問題じゃなかった。わたしは、はっきりさせると、革命の本当のチャンピオンとしてレーニンとその党を擁護した時、重大な過ちを犯したのです。けれどロシアが外敵によって攻撃される限り、彼等に反対する活動には従いたくなかった。むろん彼等の仮面に騙されないけど、わたしの問題はずっと深くにあるのでした。革命自体です。革命の表現は、わたしが考えたり宣伝した革命よりずっと多様で、どちらが正しいのか判らなかった。わたしの旧い価値は難破して、沈むにしろ泳ぐにしろ、船から放りだされたのです。わたしに出来ることと言えば、水の上に頭をだし、安全な岸に連れていって呉れる時間に頼るだけでした。

カルコフで逢った最も知的な同志達、フレシン、マーク・ムラチニーは理解して呉れ、他の人びとを自分の行き場のない道筋に導くのを拒否するわたしの立場を支持して呉れました。〈ナバート〉グループの他の人達は、それが不満で怒るのでした。彼等はアメリカで得たエマ・ゴールドマンの観念が、

現在の蒼白なイメージだったと認めるのを拒否したのです。それからサーシヤに大いに期待した。サーシヤは革命が何を要求しようと、決して革命を疑わないと知っていたのです。サーシヤはわたしより良い反逆者で、マフノと一緒に働くとか少くとも彼の協働の申込みを受けるのが大きな価値ありとみていました。だからマフノの陣営から、わたし達を招待して、フアニア・バロンが来ると彼等はすぐ加ったのです。わたし達も一緒に来るか？　彼女は安全にマフノまで導いて呉れるでしょう。〈きみも来るかい？〉サーシヤが訊ねた。もし彼が固執するなら一緒にいなくてはならない。わたしはそう答えました。どんな状態でも彼だけ危険にさらす訳にいかない。でもこの探訪旅行はどうなるだろう？　わたし達は最後まで続けると約束したし、この冒険の責任の大部分は、彼が引受けたのです。ひき返そうか？　機会があればマフノとその軍隊に接触して…というのがサーシヤの考えで、博物館や探訪旅行のことを気にかけていない様子でした。〈誓いは誓いだ〉サーシヤが言った。〈われわれは従うべきだろうね。あの農民指導者には、また逢う機会があるだろう〉……

ロシア大変動の中で、わたしのアメリカにおける以前の生活は色あせてしまい、生きた組成は夢のような残骸となり、確固とした足場のない影のようで、わたしの価値観は霧散したのです。でも〈大地〉誌の一冊をみつけ（エマはキエフで、ロシアのアナーキストが米国から持ちこんでいた〈大地〉誌の数冊をみせられた—訳註）それがわたしの目的を失った無用の存在を鋭く、よみがえらせたのです。なつかしさ、激しいなつかしさが骨の髄まで把えました。でもこの地方の極く同情的な同志、ソーニヤ・アヴルツカーヤがやってきて現実に引き戻して呉れたのです。彼女は農民の服装をした知ら

ない若い婦人と一緒でした。そのひとはネストル・マフノの妻、ガリーナだと紹介されたのです。わたしは彼女やソーニア、それにわたし達が脅かされる危険性を考えると自分の苦悩も忘れてしまった。

マフノの首は生死にかかわらず、ボルシェヴキが賞金をかけているのです。彼等はマフノを捕えられないで、彼の兄と彼の妻の家族の何人かを既に殺しました。マフノと何か関係が少しでも疑われると、身の危険が迫るのです。みつかるとガリーナの死は確実でした。どうして彼女は危険を冒し、わたし達の所へ来たのだろうか。ここは当局に知られ、ボルシェヴキの訪問者もあるのです。危険には慣れています…とガリーナは言った。訪問の目的は他人に委せられない重要なものでした。彼女はネストルからの伝言を伝え、計画中の行動に同意するよう、サーシヤとわたしに求めてきました。彼はキエフから遠くない場所に、分遣隊を連れてきているのです。彼の計画では、南に向うわたし達の列車を止め、わたし達を捕虜にしたことにする。で探訪旅行の残留者はそのまま目的地に向わせる。彼は自分の立場と目的を説明したいのであって、わたし達を安全にソヴェト領地に送り返す。そういう戦術なら、わたし達が大っぴらに彼と接触したとの疑惑はかからないだろう。それが絶望的な企図なのは知っているが、自分の立場も同じだけそうなのだ。ボルシェヴキが嘘をつき、彼とその農民軍の革命的高潔性は非難され、アナーキスト・インターナショナリストとしての彼の動機も誤解されている。

わたし達だけがロシア以外のプロレタリアの世界に、彼の立場—彼は盗賊でもなければユダヤ人大虐殺者でもない、事実、ユダヤ人に罪を犯した農民軍人の罪科は、彼の手で処罰した。彼は最後まで革命の側にいるのだから、わたし達が、彼のために力強い連帯のサービスをして呉れるよう自分の口から目的を語りたいとのことでした。彼の計画に同意しようか？

優れた構想で、無謀な勇敢さ、その冒険的なところが、マフノの伝言者の美貌と若さでひきつけら

れました。サーシヤとヘンリーがやってきて、わたし達は、ガリーナの熱心な訴えに魅惑されました。サーシヤの反逆的想像力に火がつき、すぐにでも同意するところでした。わたしも酷く受け入れたい気持でした。でも他の人達、探訪の同行者達のことも考えなければなりません。重大な結果を及ぼすのに、他人の人達を盲滅法に引きこむことはできないのです。それにまた引きとめる別なものがあったのです。わたしは今だにボルシェヴキが革命団体だとして、わたしをつなぐ紐が断ち切れないでいた。知的にはもう受け入れられなくても感情ではまだ切り離そうと試みている段階の人びとに対し、明白な嘘をつく罪は犯せないと思った。

市街ではマフノの妻を隠す場所はなかった。わたしの部屋だけが少しは安全だが、一晩だけのものでした。ガリーナと過した時間は、緊張して感動的でした。わたし達は闇の中に坐り、時々月の光が彼女の愛らしい顔を明るくするのでした。彼女はわたしの部屋での危険は全く気にかけない様子でした。彼女は生きいきとして、外国特にアメリカにいる彼女の姉妹の生活や仕事ぶりについて知りたがりました。アメリカでの女達は何をしているのか、女性の独立と認められるためには何をしたのか、性的関係、子供に対する女の権利、産制はどうなっているのか…と訊ねるのでした。わたしは原始的な環境に生まれ育った娘の、知識と情報への渇望をみて驚いた。彼女の熱心さがわたし自身の主要な動機に移り、しばらく回復させて呉れたのです。朝が明け始め、別れなければならなかった。ガリーナは強く確かな足どりで、曙の中を踏みだすのです。わたしは昇降口のうしろに佇み、彼女のうすれ行く姿を見送りました。

レーニンとの会見

アンジェリカ(アンジェリカ・バルバノフは第三回インターナショナルの際秘書を勤めた女性革命家。ツノビエフ、ブーハリンの官僚主義に反対したため、政府機構では重要な地位が与えられなかった―訳註)はわたしがレーニンに逢うべきだと言うので、ソヴェトの生活で最も激しい矛盾についてメモをとることにしました。でも会見について別に何も知らされないので、この問題はそのままにしていました。或る朝、アンジェリカは電話で〝イリイッチ〟がサーシヤとわたしに逢いたいと待っている、それに自家用車がさしむけられていると連絡して呉れたのですが、これには非常に面喰いました。わたし達は、レーニンが仕事に忙殺され、近づき難いのは知っていた。わたし達のためを思って呉れるのは例外で、遁がせない機会です。例えメモがなくても討論すべきですし、またモスクワの同志達がわたし達に依頼した決議文を彼に手渡すいい機会です。

レーニン差廻しの自動車は、混雑する街路を疾駆して守衛に敬礼することなく、クレムリン宮に入りました。古い建物の別棟の玄関で降りるよう言われました。武装した守衛は、前もってわたし達の来訪を知らされているらしく、エレベーターの傍に立っていました。一言も発しない彼は、ドアを開け、わたし達を入れるとドアに鍵をかけ、その鍵は自分のポケットに入れるのです。それから二階に居る兵士にとどく声で、わたし達の氏名が呼ばれました。そうした呼びかけは階を昇るに従って連絡されるのです。エレベーターがゆっくり昇るにつれて、唱和がつづきます。最上階でエレベーターの

扉の錠を外しまた錠をかけ、わたし達は、広い謁見の間へ通され、〈同志ゴールドマン、ベルクマン〉と告げられました。わたし達は暫く待つように言われたけど、最高の座へ案内される儀式までには、ほぼ一時間かかりました。若い男が付いて来るよう命じました。わたし達は数多くの室を通り、いづれも忙がしく、タイプの音や連絡員があわただしく立働いているのでした。わたし達は美しい彫刻で飾られた厳重な扉の前で立止まらされた。一寸待って欲しいと断って、彼はドアの奥に消えた。間もなく重い扉は内側から開かれ、案内者がわたし達を招き入れ、自分は消え、扉を閉めた。わたし達は闕に佇んでこの奇妙な成行きでの次ぎの出方を待った。二つの斜眼が突き刺す鋭さでわたし達を注視した。その眼の持主は大きな机を前にして坐り、机上の書類は厳しく整頓されて居、部屋の様子も厳格な印象を与えました。片側には電話のスイッチを沢山つけた盤があり、その男の背後の壁は全面を覆った世界地図が掲げられ、ガラスケースには厚い本がぎっしりつまっていました。大きな長方形の机は赤く飾られ、十二箇の背のまっすぐな椅子、窓側には幾つかの肘掛椅子があった。燃えるような赤色を除くと、普通の退屈さをやわらげるものは何もなかった。

かような背景は、生活習慣の厳しさと事実性で有名な人にふさわしいものでした。レーニン、世界中で偶像化され嫌われていると同時に怖れられる人は、ここの厳しく単純な様子がもう少しゆるめられていたら、場違いな感じでした。

〈イリイッチは前置きに時間をかけない人です。彼は対象に直接ぶっかるのです〉以前、ゾーリンが誇らかにわたしに言った。実際、一九一七年以来レーニンがやったことはそれを証明している。けれどわたし達が疑問に思ったのは、わたし達の受入れ方と会見の仕方から、イリイッチは情緒の節約を思い知らせて呉れたことでした。レーニンが他人の中に自分の与えるべきものを素早く知覚し、そ

れを自分の目的に宛て活用する技能は特異でした。彼が自分とか訪問者に何かこっけいさを認めると大笑いするのも同じく驚きでした。特に人に不利をかけると、偉大なレーニンは笑い飛ばして、その人にも彼と一緒に笑うよう強ひるのでした。

彼の鋭い吟味はわたし達を骨がらみにし、電光石火の頭脳から放たれる矢のような質問にさらされました。アメリカの政治的経済的状態―近い将来あすこに革命の機会があるか。全米労働連盟―ブルジョワイデオロギーで蜂の巣になっていないか、それともコンパスやその同僚の溜り場ではないのか、それとも内部は下層階級の養いの土壌なのか？　I・W・W―その力は、それからアナーキスト達は最近の裁判で示した程、効力をもっているのかどうか。彼は丁度、わたし達の法廷陳述を読んだところだと言いました。〈立派な資料です！　資本主義の明解な分析、優れた宣伝です〉しかし残念なのは、何を代償にしてもあなた方が米国に留まれなかったこと。ロシアではむろん歓迎される。しかし近づく革命ではあなた方のような闘士が米国において最も必要なのだ、〈あなた方の最良の同志達が数多くわたし達の側にいたように〉。

「それに君、同志ベルクマン、貴君はシャトフのような組織者にならなければいけない。貴君の同志シャトフは鑑です。何も厭がらず十二人前ぐらい働く。現在シベリアで極東共和国の鉄道委員です。他に多くのアナーキストがわれわれの側で重要な地位にある。本当の理念のアナーキストとして、われわれと喜んで協働するなら、すべてが彼等に開放されているのです。同志ベルクマン、貴君もすぐ地位がみつかるでしょう。残念なのはこの大事な時節にアメリカからきり離されたことです。それから同志ゴールドマン、貴女？　立派な活動分野を持って居られた。貴女は留まれたのです。例え同志ベルクマンが立去っても何故留まらなかったのだろう？　しかしあなた方はここに居られる。あな

た方が理念（イデー）のアナーキストであることは、戦争での立場、〝十月革命の擁護〟われわれのために戦ったこと、ソヴェトに対する信頼などでよく判っています。あなた方の偉大な同志、マラテスターと同じく、ソヴェトロシアの側に居られる。あなた方がしたいのは何ですか？」

最初に発言したのはサーシヤでした。彼は英語で話したのですが、レーニンは楽しそうな笑い声で押しとどめました。

「私に英語が判ると思いますか。一言も知らないのですよ。他の外国語も駄目です。得意じゃない。長年外国に住んでいましたがね。お可笑いでしょう？」

それから彼は笑いころげた。サーシヤはロシア語で言葉をつづけた。彼は自分の同志達が高く評価されるのは誇らしい。だが何故アナーキストがソヴェトの刑務所に入れられたのかと訊ねました。

「アナーキストですって？」イリイッチはさえぎった。

「ナンセンスだ！　誰が貴君にそんな話をしましたか。それにどうして信じるのです？　盗賊、それにマフノの徒は刑務所にいる。しかし理念（イデー）のアナーキストはひとりも入っていないのです。」

わたしが口を出しました。

「考えて戴きたいのは、資本家のアメリカでもアナーキストは、思想的と犯罪的の二種類に分類されるのです。思想的なのは、上流階級で受け入られています。その中の高級な人は、ウイルソン大統領の行政に参画さえしているのです。わたし達が名誉にも属している犯罪的な方はいつも迫害され、刑務所に入れられます。貴方の方でも差別はしないにしても、区別はしている様子です。そうじゃないでしょうか？」

レーニンはわたしの考え方が悪く、異る前提から似たような結論を引きだして、頭が混乱している

と答えました。言論の自由はブルジョワの偏見で、社会の病気に対する慰しゃ的膏薬だ。労働者の共和国では経済福祉が言論よりももっと高らかに語り、その自由はずっと安定している。プロレタリアートの独裁は、その方向に舵を取っているのである。現在それが直面している重大な障害、その最大のものは農民の反対である。彼等は釘、塩、衣料、トラクター、電化を要求している。われわれがそうしたものを与えることができれば、農民はわれわれの側に付き、反革命勢力が押しかえすことはできない。ロシアの現状で、自由について喋々するのはロシアを倒そうとする反動の餌食になるだけだ。盗賊だけはそれをやるので有罪である。だから鉄格子の中に入れておくのだ。レーニンはそう語った。

サーシャはアナーキスト会議の決議書をレーニンに手渡し、モスクワの同志達は、刑務所に入れられているのが理念（イデー）のアナーキストだと確認している旨を強調した。〈わたしの仲間が合法性を求めている事実は、彼等が革命とソヴェトの側にいることの証明です〉とわたし達は答弁した。レーニンは、記録を受け取り、党の実行委の次ぎの会議にかけることを約束した。その決定は注目されるのだが、いづれにせよそれは大したことではない。本当の革命家を患らわせるものではない、と彼は言った。

他に何かあるのでしょうか。わたし達はアメリカで、例えわたし達の敵のものでも政治的権利のためには闘った。だから彼等をわたし達の同志じゃないと否定するのは、わたし達にとってとるに足らないことではないのです。とわたし達は答えた。例えばわたし（エマ・ゴールドマンの事―訳註）はアナーキストとかその他の人でも単に意見のために迫害する体制には協働できないと思うと彼に告げた。その上ぞっとするような悪がはびこっている。わたし達は、彼が目ざしている高い目標とそれを、どのように調和させればよいのだろうか。わたしはその幾つかを指摘しました。彼の答はわたしの態度がブルジョワの感傷だと言うのです。プロレタリアートの独裁は生死をかけた闘争である。

小さな考慮は規模において問題にならない。ロシアは国内と外国において巨歩を印している。世界革命の引金なのだ。だからわたしはそれを克服すべきだ。「何かやり給え。それがあなたの革命的均衡を保つ最善の方法です。」と彼は助言して呉れた。

わたしはレーニンが正しいかも知れないと考えました。彼の助言を受け入れよう。そして直ちにとりかかりましようと答えた。だがロシアにおいて仕事はしない、米国向けに価値のある宣伝をするのです。わたしは〝アメリカの自由に対するロシア友の会〟を組織したい。それは自由を求めるアメリカの闘争を支援する活動母体で、以前ロシアが皇帝制に反対した際〝ロシアの自由に対するアメリカ友の会〟のやったと同じことをするのです。

レーニンはそれまでずっと席を動かなかったのですが、この話で椅子から飛び上りました。彼は席を廻わり、わたし達とむきあって、

「それは素晴らしい考えだ。」彼は叫び、くっくっと笑って手をもみました。

「立派な実際的提案です。直ちにとりかかるべきだ。同志(タバリシチ)ベルクマン、貴君も参加するでしようね?」

サーシヤはその問題で討議を重ね、計画の細部をすでに考えていると答えました。わたし達は必要な準備が整えばすぐ実行できる。

レーニンはその心配はいらない。すべてを供給しよう—例えば事務所、印刷設備、下働きの人員、それから必要などれだけの資金でも—と保証しました。わたし達は仕事の見込みとそのプロジェクトに要する費用の諸項目を彼に提出しなければならない。第三回インターナショナルでその問題を討議しよう。それがわたし達の試行の適切なルートであり、支援の手が差のべられるだろうと彼は言います。

わたし達はあっけにとられお互いに顔を見合わせ、レーニンを眺めました。それと同時に、わたし

達の尽力は、いわゆるボオルシェヴィキの組織と提携しない自由があって、効果を現わすのだと説明しました。わたし達のやり方でしなければならないのです。わたし達はアメリカ人の心理をよく知って居、仕事をどうすすめるのが最善かも知っています。けれどそれ以上説明する時間もなく、わたし達の案内人が立去った時と同じように邪魔にならないよう突然現われ、レーニンは別れの手を差し出しました。

「私に見込みを知らせて下さい。」

わたし達の背後から彼は呼びかけました。

*この会見は一九二〇年の暮に近く行なわれたものと推定される。

P・クロポトキンを訪問[*1]

列車は水タンクの各設置所で止まりながら蛇行のように進んだ。わたし達が彼の家に着いたのは夜も更けていました。ピーターは病気でやつれていた。一九〇七年パリとロンドンでわたしが見かけた頑健な頃の人影をみるようでした。わたしがロシアに来てから、著名な共産主義者達は、クロポトキンが快適な生活を送り、食物や燃料に不足していないと繰返し保障しました。だけどここではピータ